

# 湯 | 寛 | 冬 | 楽

名物鍋に舌づつみ  
湯にくつろぎ、冬を楽しむ

**ご宿泊プラン (1泊2食・税別)**  
特選はたん鍋「亀峰」(又は、会席「亀峰」)  
お1人様 24,000円<山の菴 2名1室利用>  
| 期間 | 12月1日~3月末迄



**日帰り、冬の平日プラン**  
鍋「湯の花」●丹波地鶏鍋●かにちり●はたん鍋  
お1人様 6,500円(昼食又は夕食)  
宿泊でもご利用いただけますので、ご相談ください。  
| 期間 | 12月1日~2月末迄



## 特典 (20名様以上)

- 無料送迎バス (京都市内、池田、川西、能勢方面)
- 飲み放題 3,000円 (120分)

<ビール、お酒、ウイスキー、焼酎、ジュース>



すべて予約が必要です。2名様よりお申し込み下さい。ご昼食の場合、入湯料500円



京の田舎湯の花温泉

たや亀峰菴

電話 0771-22-0394

京都府亀岡市葺田野町湯の花温泉



トライアル・コーディネーター

# 岩佐 賢一

I W A S A K E N I C H I

KYOTIAN I.D.

キョーティアンアイディ

【プロフィール】78年京都府生まれ。中学生でトライアルと出会う。以降、競技者やスタッフ、プランナーなど様々なポジションからトライアルに関わり続けている。  
【トライアルとは】マウンテンバイクに乗り、足などを地面に着けずにコースをクリアしてゆく競技。足を付く回数や内容で減点され、総ポイントを競うもので、スペインが発祥の地。デュアルトライアルとは、障害物が設けられた平行する2つのコースを2人のライダーが同時に走ってスピードを競う競技。

## 競技者+編集者+プランナー 自転車をシャフトに広がる世界



ヘルメット・プロテクター・グローブは必須アイテム。けど、写真撮影(上写真)の時は確かヘルメットなしだったのでは...? 「ほ、そんな時も(笑)。けどレースでは必須ですからね、もちろん、自分のためです」



「そんなに高くはないです」という愛用の一台。「トライアル用だと高いと思われるようだけど、そんなことはないです。安ければ6万円くらいのもので、充分使えます」と、お気に入りの現在は「TECHNI」という国産ブランド



創刊から5冊目が発刊されるまでの1年少しの期間で、企画も構成もぐんぐん魅力的に成長していった「Will」トライアルに触れる入門書としても最適なバックナンバーのみ現在も発売中。手に入れた人はメールにて問い合わせ

**Information**  
岩佐賢一/GOLDRUSH  
■HP: <http://www.gdr.jp>  
■E-mail: [mail@gdr.jp](mailto:mail@gdr.jp)  
■デュアルトライアルレース  
日時: 5月3日~4日 場所: 函館山

岩佐賢一さんの肩書きや職業を羅列したとすれば、名刺などはあつという間にいっぱいになりスペースがなくなってしまうだろう。まずはバイクトライアルの競技者からスタート。そこにトライアルの世界を広く伝えたいと、雑誌を自ら創刊・発行する編集者としての顔が加わる。同時にまだまだ高価であったり、手に入りづらいパーツを自ら輸入・販売し始めた。そしてなかなか乗る場所やチャンスの少ない子供達のため練習会を開催。昨年9月には同じく自転車の競技ながら、少しジャンルの異なるデュアルトライアル・レースを日本で初めて企画・開催した。これからはまだまだ肩書きは増えそうだ。

12才で流行のマウンテンバイクを手に入れた。野山を乗り回していた岩佐少年の目に、ある日、トライアルに取り組む人の姿が飛び込んできた。「かっこエエやん! あれやろ!」。そこから競技の世界にどっぷり浸る。距離を置く時期がありつつも競技を続けた後、20才を前にして少しアメリカで暮らした。そこで感じたのは「やっぱり文化の蓄積の仕方が違う。下手でもみんな楽しんでるやん。それにトライアル後進国なのに、雑誌まであるやん!」。トライアル=競技だけではないことに気付き、トライアル人口の底辺を広げる手だてが見えた。即帰国、資金を稼ぐと同時に、独学でパソコンや編集の勉強をした。「自転車は好き。何かしたい。けどそれは何?」と煮詰まっていた岩佐さんは、まるで水を得た魚のごとく活動し、帰国後半年にして雑誌「Will」を創刊する。内容面からも資金面からも驚異的なスピードである。レースのレポートから、インタビュー、パーツの紹介と幅広い内容で構成された季刊誌「Will」は、約1年半前に5冊目が発行されたところで、一旦休刊となる。資金不足? いやそうではない。「読んでくれているのは既存の関係者のみ、という現実を変えたいと思った」彼は、より多くの人へと届くようホームページの作成へと発信の手段を変えたのだ。

「自分達でも決めつけてしまっている部分はあるけど、トライアルって少し特殊でしょ。けれど競技うぬぬん、テクニクがどう、というのではなくて、もっと単純に自転車で遊ぶのって楽しいもの。小技ならママチャリでもやれるしね。これからは子供達が乗れる場所や環境も作っていききたいし、どんどん裾野を広げたい」と目を輝かせる。彼のような地道な力が、日本トライアル界を動かすのだと、思えてならない。